

表紙解説

「開館40周年記念 宇田萩郵展」より 道田 美貴

今号の表紙をかざる《飛香舎ひきゅうしゃ》は、平安時代の内裏五舎のひとつ。庭に藤の花が植えられていたことから、藤壺とも呼ばれる。「源氏物語」の主人公・光源氏が思慕した藤壺の宮で知られるこの殿舎を、日本画家・宇田萩郵（1896–1980）は、典雅に咲きこぼれる藤の花とその間からわずかにのぞく部屋で描き出した。人の姿も説明的な描き込みも一切見当たらないが、藤壺に住まう気品ある女御や藤の花の下に集う王朝の人々の気配をも感じさせる一点である。

三重県松阪に生まれた萩郵は、伊勢の画家・中村左洲さしゅうに手ほどきを受けた後に上洛。京都画壇の菊池芳文よしふみ、芳文没後はその養嗣子梨月りげつのもとで研鑽を積んだ。故郷を離れ、京の長い歴史と伝統に真摯に向かい合い、流麗な線描と明るく爽やかな色彩で、他とは一線を画する清澄な画境を確立した。生涯変わることなく京洛の四季を描き続けたことから、「京洛の画家」とも称される。孤高の画家が描き出す京洛風景は、時として実景を超えるほどに格調高く、美しい。

宇田萩郵《飛香舎（藤壺）》1965年 松阪市

利用のご案内

■開館時間 9:30–17:00（入館は16:30まで）

■休館日

月曜日（祝休日にあたる場合は開館、翌日閉館、2022年5月2日は開館）
[2022年3月22日(火)、7月19日(火)、9月20日(火)、10月11日(火)]

■観覧料

【常設展示の場合】
〈美術館のコレクション+特集展示／柳原義達の芸術〉
一般：310（200）円／学生：210（160）円／高校生以下無料
（ ）内は20名以上の団体割引料金

【企画展示の場合】
その都度定めます。

※学校の教育活動として県内の小・中・高・特別支援学校等が観覧する場合、引率者も含めて無料となります。
※障害者手帳等をお持ちの方が観覧する場合、付き添いの方1名を含めて無料となります。
※家庭の日（毎月第3日曜日）の観覧料は各展覧会（企画展／常設展）の団体割引料金となります。
※県民の日[2022年4月16日(土)]は常設展の観覧が無料になります。

■メールマガジン

三重県立美術館の情報をみなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。登録無料。詳しくは、美術館ホームページをご覧ください。

■美術館公式 Twitter

三重県立美術館の最新情報をリアルタイムで配信しています。
Follow us on Twitter @mie_kenbi



■交通

津駅（近鉄・JR）西口より徒歩約10分または、津駅西口1番のりばより三重交通バス「西団地循環」、「津西ハイタウン行き（むつみ・つつじ経由）」、「夢が丘団地行き（総合文化センター前経由）」、「総合文化センター行き」のいずれかに乗車約2分、「美術館前」下車徒歩約1分

※できる限り公共交通機関をご利用ください

三重県立美術館 Mie Prefectural Art Museum

〒514-0007 津市大谷町11

Tel: 059-227-2100 / Fax: 059-223-0570

<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/>

三重県立美術館ニュース「HILL WIND 50」

発行日：2022年3月16日（禁・無断転載）

企画・編集・発行：三重県立美術館

印刷：株式会社アイブレーション

デザイン：豊永政史

■「三重県立美術館友の会」へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、美術散歩等、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。
○年会費：一般会員 3,000円／ペア会員 5,000円／グループ会員（4名）8,000円
○特典：鑑賞券配付、観覧料半額割引、レストラン・ミュージアムショップご利用割引等。
詳細は三重県立美術館友の会事務局（TEL. 059-227-2232）までお問い合わせください。

■「公益財団法人 三重県立美術館協会賛助会員」へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布等、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。趣旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。
○会費：年間一口 法人 50,000円／個人 25,000円／準会員 10,000円
○特典：展覧会ならびにレセプションへの招待、各展覧会のカタログ謹呈（準会員は半額）等。
詳細は三重県立美術館協会事務局（TEL. 059-227-2232）までお問い合わせください。

HILL WIND

三重県立美術館ニュース

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM NEWS

三重の美術風土を探る④ — 桑名の夜明けとモンペエ会

原 舞子

「桑名の夜は暗かった」という言葉から始まる詩「桑名の駅」を、詩人・中原中也が詠んでいる。1935年8月、郷里の山口からの帰省の途中、台風による大雨で大阪・京都間が不通となり、中原の乗る東海道線は奈良、三重を通る関西線回りで運行された。夜更け、時間調整か何らかの事態が起き、列車は桑名駅にしばらく停車したらしい。中原は駅のプラットフォームにランプを持ってひとり佇む駅長に話しかけ、焼き蛤の話などを駅長と交わした。このときの出来事が詩に詠まれている。三連の短い詩だが、台風が過ぎ去った後の静かで澄んだ空気が闇の中に充滿しているさまが目に見え、浮かぶような詩である。

「桑名の夜は暗かった／蛙がコロコロ鳴いていた／大雨の、霽ったばかりのその夜は／風もなければ暗かった」

詩「サーカス」で謳われた「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」ほどではないにせよ、蛙の鳴き声を「コロコロ」と表現するのは、いかにもオノマトペに長けた中原らしい。中原は「桑名の駅」を詠んだ2年後の1937年、30歳という若さでこの世を去った。

中原の死の翌年、詩雑誌「四季」上で中原中也賞が創設された¹。この賞は現在の同名の賞とは異なるもので、戦争による出資者の事業悪化がもとで第3回までで終了した。第1回(1939)は立原道造が、第2回(1941)は高森文夫、杉山平一の2名が受賞し、最後となった第3回

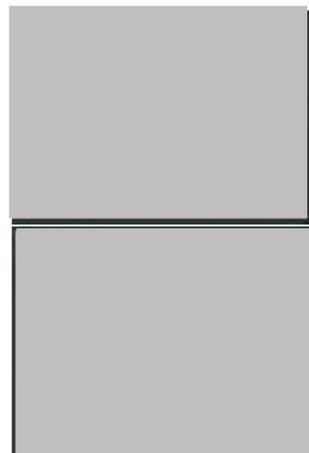


図1



図2

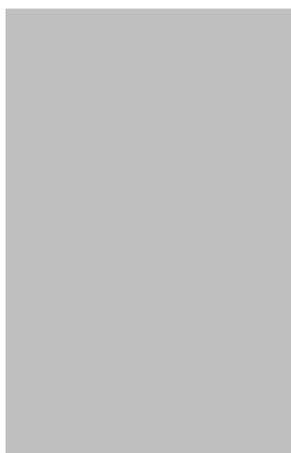


図3

(1942)は三重県出身の平岡潤(1906–1975)が受賞した。

平岡潤は、桑名の郷土史を編纂した人物として地元ではよく知られている。一方、詩人、画家としての活動については今ではほとんど知られていない。1906年、桑名に生まれた平岡は、明治大学商学部を卒業後、歩兵第六連隊幹部候補生として入隊。戦時中は歩兵少尉、続いて歩兵中尉として軍務に服した。軍務の傍ら、詩作や絵画制作に打ち込み、詩雑誌への投稿や白日会、自由美術家協会といった美術団体展への出品を重ねている。先に述べた第3回中原中也賞は1942年6月に自ら装幀を手がけて自費出版した詩集「茉莉花」に対して与えられたもので、雑誌「四季」1942年12月号には本人の受賞の言葉および詩人の津村信夫、阪本越郎、丸山薫からの推薦の言葉が掲載された。中原中也賞を受賞する以前には、画家としても活躍し、1937年の第1回自由美術家協会展では協会賞を受賞し、会友となる。自由美術家協会の創設会員のひとりであり、日本における抽象絵画の先駆者でもある長谷川三郎は、平岡の才能を激賞し、「彼の作品は新しい精神と手法に溢れ、而も既に或る個性的な完成迄示してある」²という賛辞を寄せている。平岡が自由美術家協会展に出品していた作品は、デカルコマニーやフォトグラムなど、シュルレアリストたちが取り組んでいた手法を用いて制作されたものである(図1、2)。平岡の回想によれば、当時はアルプ、ミロ、カンディンスキー、モンドリアンなどの作品を通じて新しい芸術の潮流を吸収し、自身の制作に反映していたという。

新進の詩人として画家として、それぞれ高い評価を得ていたにも関わらず、それらの活動が戦後に続くことがなかったのは、時代に翻弄された結果としか言いようがない。戦時中の平岡は、軍務に従事しながらも詩集の出版や絵画制作に励み、収容所生活のさなかには「LIFE」誌に掲載されたサルバドール・ダリ論³の翻訳も試みていたといい、芸術に関わる道を並走していた。終戦翌年に桑名に戻ると中学校の教職に復任するが、戦前の軍歴が影響して公職追放という憂き目にあう。職を失った平岡は、戦後の混乱の中、桑名の古い資料が散逸することを懸念し、古本屋を開業して自ら資料収集にあたり、詩を中心に約3千冊の書籍を集めたという。古書店としては繁盛しなかったが、この店は郷土史資料を集める窓口となった。古本屋業を起点として平岡は、漢学者で中学時代の恩師、近藤壺と再会し、ともに「桑名市史」の編纂を始めることとなる。詩人としての筆、画家としての筆の両方を折るよりほかなかった平岡は、郷土資料の収集と編集、文化財保護活動を通して桑名の文化史を拾い続けた。いわば、郷土史編纂という新たな筆に持ち替えて、戦後の再スタートを切ったともいえよう。その筆は、かつてそこにあつたものを拾い集め、歴史として記録していくことにとどまらず、桑名で新たに巻き起こっていた若い世代の芸術活動にも目を向け、後世に伝える役割をも果たすこととなる。そのひとつとして、「モンペエ会」について触れておきたい。

「モンペエ会」は1954年頃、桑名在住の洋画家・小林研三(1924–2001)らを中心に結成された。当時三十代前後の画家を志す若者たちが集まり、月に一度の批評会の開催や、会員による展覧会の実施、市民展への出品を重ねた。1956年の新聞記事によれば、前年の第1回モンペエ会展は2日間の会期で500名、この年の第2回モンペエ会展では2日間で1000人を超える来場者を集めたという⁵。第2回展の案内はがき(図3)には小林研三によるイラストがあしらわれ、19名の会員の名前が確認できる。彼らは市民展、三重県展への出品と入選や、二紀会、春陽会、美術文化協会などの全国的な美術団体展への入選を重ね、各団体の同人となって画壇と結びついていくこととなる。モンペエ会に参加する以前から美術団体に所属していたものもいれば、会員同士の交流のなかで画風や方向性を見定め、それぞれに見合う美術団体を紹介し合い選択することもあったようである。会員たちの活動が多方面へ広がったこともあり、モンペエ会はその役割を終え、およそ10年で発展的解消というかたちをとることとなった。

会員のひとり、小林研三は田園風景の中に鳥や身近な動物たちを描く牧歌的な作風の画家として知られている。小林は1942年、18歳のときに二科展に初入選しているが、戦時下、美術団体は解散し、小林も徴兵されたために数年のブランクを余儀なくされた。戦後は二紀会に所属し、1972年からは会を離れて生涯桑名で描き続けた。モンペエ会結成前後の時期は、写実傾向の強い静物画や風景画、パウル・クレーに影響を受けたと思われ

る色面を分けた画面構成など、さまざまな作風を試みている。モンペエ会での活動を通して自身の作風を模索し、会の同世代の画家仲間と切磋琢磨していた様子がこれらの作品からはうかがえる。1960年代に入ってから鳥が主要なモチーフに据えられ、白を基調とした地に赤・青・黄の斑点が散りばめられた空間の中に羽ばたく、あるいは地面を跳ねる鳥の姿が描かれた。1970年代以降は旅先のヨーロッパの風景や桑名の自宅周辺の田園風景を淡い色彩で描く画風へと変化し、以後、亡くなるまで一連の風景作品を制作した。

小林と同じ二紀会を活動の場とした山口幸平(1925–2020)は、のちに児童文学の挿絵や装幀を手がけたことも知られている。モンペエ会に参加していた時期の作品では、労働者や市井の人々を茶褐色を基調とした色彩で描いている。《トロッコ》(図4)では、山の中腹に木製のトロッコが置かれ、その脇に柄の長いシャベルを手にした人物がたたずみ、背後には別のトロッコを押して坂道を上る人物の姿も見える。中央のトロッコの描写に比べて、左の人物は簡略化した線描のみで描かれている。この作品を見て思い起こされるのが、洋画家・海老原喜之助の戦後の代表作のひとつ、《船を造る人》(1954年、北九州市立美術館蔵)である。鮮やかな青い空を背景に黄土色の船の骨組みと木材を切る人物の姿が画面いっぱいに描かれた作品で、戦後の復興期の高揚感や力強さを表した作品として世

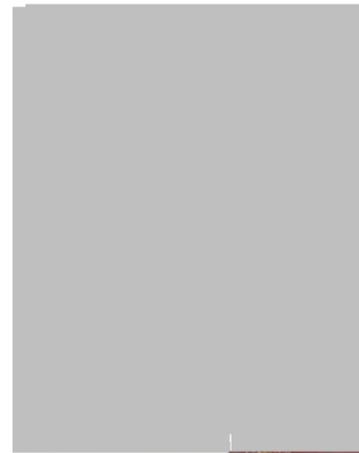


図4



図5

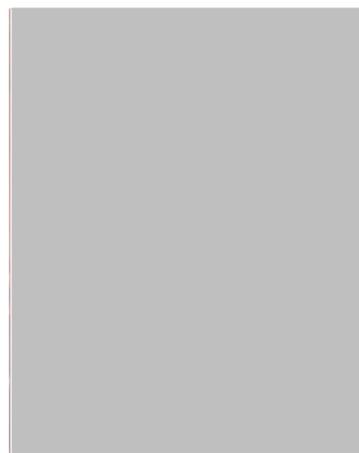


図6

に知られている。山口の《トロッコ》は、画面の色彩や労働をテーマとした点において共通するものがあるが、海老原の作品に表された力強さとは対極的に、広大な土地を舞台に労働にいそむ人々の過酷さやある種のわびしさに目を向けた力作といっていよう。

堀田修(1930–2009)はモンペエ会で研鑽を積み、25歳で美術文化協会展に初入選を果たした。この時期の堀田は、福沢一郎、古沢岩美といった美術文化協会の創設者たちに傾倒していたという。初期の作品(図5)に描かれた、引き伸ばされねじれた人物像は、福沢や古沢も一時期多大な影響を受けたサルバドール・ダリの画風を想起させる。やがて具象的なモチーフが消え、抽象的なかたちが画面を覆い、絵具をしたたらせるドリッピングの技法を一部に用いた作品(図6)のように抽象表現主義やアンフォルメルなどを取り入れた作風へと変化する。また、曼荼羅を思わせる円形を配置した幾何学的な作品や、コラージュをほどこした作品を制作し、最終的にはグレーの色面にアラビア数字をあらわしたパネル状の作品へと変化した。次々と貪欲に当時の美術潮流を吸収し、キャンバス上に落とし込んでいった堀田に対し、後年、平岡潤は「手にとるように私にはよくわかるのである」⁶と書き記した。その書きぶりは、あり得たかもしれない己の姿を若い世代の芸術家たちに投影していたかのようで、自身の過去に対し複雑な思いを抱き続けていた平岡の心が察せられる。

先にも述べた通り、モンペエ会は会員たちが各自の所属団体を見出し、

活動を広げていったために自然解消することとなった。しかし、地縁を軸にしたモンペエ会は、それぞれが持つ美術の主義主張や会派を越えて会員同士が心ゆくまで議論を交わし、まとまり、つながる場であり続けたのだろう。彼らは後年まで、当時を振り返って会を懐かしんでいたと聞く。モンペエ会というプラットフォームから、会員たちはそれぞれ旅立っていった。〈桑名の駅〉の夜明けは、明るくまぶしいものだったに違いない。

謝辞

本稿執筆にあたって、下記の方々、機関に多大なるご協力を賜りました。記して感謝申し上げます(五十音順、敬称略)。

小池勇、下里梨花、杉本竜、水谷や江子、八島正明、安原さと、安原弘高、山口信介
桑名市博物館

また、本稿掲載の図版の中で、著作権継承者の方々に連絡がつかず、許諾手続きがとれていないものがあります。著作権継承者をご存知の方は、筆者までご連絡いただけると幸いです。

- 図1 平岡潤《意識的デカルコマニイ 蝶蝶》 1938年 個人蔵 第2回自由美術家協会展出品
- 図2 平岡潤《エスキース(オートマチックデザイン)》 1938年 個人蔵 第3回自由美術家協会展出品
- 図3 第2回モンペエ会展 案内はがき 個人蔵
- 図4 山口幸平《トロッコ》 1955年 個人蔵
- 図5 堀田修《(作品名不詳)》 制作年不詳 個人蔵
- 図6 堀田修《業A》 制作年不詳 個人蔵

1. 大岡昇平「中原中也」講談社〈講談社文芸文庫〉、1989年。
2. 長谷川三郎「H君のこと」[アトリエ]1939年8月号。
3. “Close-Up: Dali” by Winthrop Sargeant, *LIFE*, September 24, 1945, pp. 63-68.
4. 「モンペエ会」の名称について、平岡潤は「モンペ会」と記述している(平岡潤「山口幸平 二紀会」『桑名ライオンズクラブ会報』No.38、1975年)ほか、新聞紙面では「モンペー会」(「今秋には街頭展 各展にもぞくぞく入選」『毎日新聞』1956年、掲載月日不明)と表記されている。また、関係者に行った聞き取り調査では、「モンペイ会」とする場合もあったが、今回は第2回展の案内はがきの表記にしたがい、「モンペエ会」と表記した。
5. 前掲、「毎日新聞」記事。
6. 平岡潤「堀田修 美術文化協会会員」『桑名ライオンズクラブ会報』No.39、1975年(「桑名の文化—平岡潤遺稿」平岡潤遺稿刊行会、1977年、p. 358 再録)

岡田米山人(1744–1820)は、江戸時代後期に活躍した文人画家である。詳しい出自は不明であるが、大坂で米屋を営み、余暇に学問、詩文、書画を学び、とりわけ画家として名を成した。米山人の伝記については、不明な点も少なくないが、すでに優れた先行研究があるので、ここでは詳述しない。要するに、「米屋を営み、書画の巧い変り者」¹⁾である。その才能は、伊勢国津藩の藤堂侯も認めるほどであった。のちに米山人は、津藩大坂蔵屋敷の留守居下役に抜擢されたのである。大坂蔵屋敷の留守居は、商人や掛屋との交渉に当たり藩財政の重要な役割を担う役人である。その下役とはいえ、津藩に召出されたのは、米山人の実務能力の高さが買われてのことであろう。と同時に、米山人は、蔵屋敷内に自ら「正帆」と名付けた画室をもち、致仕後であるが、藩命を受けて津藩ゆかりの寺の襖絵を描いているので²⁾、津藩にとって重要な文化人でもあった。

一、新出の自画像!?

(図1)は、米山人が描いた人物画である。客人を茶でもてなす文人の姿。柔和な顔をしている。淡墨で引いた線に黒点を打つ特徴的な目の表現は、米山人の人物画に散見される。さて、ここでは本作品を《絵事問答図》と仮に

呼ぶことにする。絵のことについて問い答える様子を描いた作品という意味である。文人と客人の会話の内容は、画賛から読み取ることができる。すなわち、

ある人絵のことを問ひしに
へたはいや上手を捨てて家をすて
画禪の門を出たり入たり

「へたはいや／上手を捨てて／家をすて／画禪の門を／出たり入たり」は、米山人自作の短歌である。ある人から絵のことを問われたのに対し、米山人が詠んだものと解釈できる。そうとすれば、描かれた文人は米山人自身ということになる。禅問答のようにも思えるが、文人画家にとっても技巧への執着を捨てるのは難しいということか。米山人の愛用印の一つに「捨明珠弄魚目」(明珠を捨てて魚目を弄す)白文長方印があるが、この短歌と似たような意味ではないだろうか。魚の目は、美しい玉のように見え



図2

るが、宝玉とは全く異なる。日々煩惱に囚われがちな人間を戒める禅語である。もっとも、この人物画は、技巧への執着を捨て去り、素朴に描かれている。

ところで、短歌に付された落款(記名)に注目したい。「よねやまの人」と款されている。米山人が用いる落款は、基本的に「米山人」であり、「米翁」や「田国」を用いることもある。「よねやまの人」すなわち“米山の人”という落款は、たいへん珍しいといえる。

米山人がこのような落款を用いた例は、筆者の知る限り、ほかに《嵐芝翫七変顔図》(図2)だけである。《嵐芝翫七変顔図》は、「芝翫賞讃帖」(個人蔵)に貼り込まれた扇面画。芝翫とは、中村芝翫こと三代目中村歌右衛門のことであり、人気の歌舞伎役者。《嵐芝翫七変顔図》は、1813(文化10)年、大坂中芝居で歌右衛門の演じた「慣ちよつと七化」を米山人が戯画したもの。のちに富岡鉄斎が米山人の《嵐芝翫七変顔図》を模写しているが³⁾、図様が若干異なるため、流行りものとして複数制作されたかもしれない。本作品で米山人が用いた落款は、「よねの山むと」であり、《絵事問答図》の「よねやまの人」と通じるものがある。

「米山人」ではなく、「よねの山むと」や「よねやまの人」を選択した基準は、その使用例があまりに少なく、不明である。狂歌など和文賛を着ける場合も、基本的に「米山人」が用いられる。以下、全くの推論になるが、《絵事問答図》と《嵐芝翫七変顔図》の共通項は、へりくだる意味の画賛である。《嵐芝翫七変顔図》には、“これはいささか新ものにてご覧にいれ、あとは西の海へさらさらとお流しになられるべき”という意味の画賛が着けられている。

「よねやまの人」という落款に注目すべき理由が、もう一つある。「米山人」は、「べいさんじん」と読み、“米屋の山人(山中に隠棲する人物)”を意味する。一方、「よねやまの人」は、“米山(地名)の人”を意味する。つまり、「米山人」には二重の意味があったと考えられる。かつて吉澤忠は、米山人の愛用印の一つを「米山乃人」と読み、「米山」を米山人の出身地と関連付けて論じた⁴⁾。今日、その愛用印は、「米山乃人」ではなく、「米山人」と読むのが通説となっている⁵⁾。しかし、不明なままとなっている米山人の出自を考える際、「米山人」という号が有力な手がかりになるに違いない。

二、寿老人は誰が描いた?

(図3)も、米山人が描いた人物画である。寿老人は長寿の神。本作品は、新出ではないが、『伊賀市史』⁶⁾でも言及されている三重県ゆかりの作品であるので、ここで紹介したい。本作品については、これまで以下のよう

に解説されてきた。若年の藤堂高基と尾張藩儒者、秦宗春の訪問を受け、話題が年齢のことに及んだのか「寿老図」を米山人が描き、両人がそれぞれ和歌一首ずつを着賛し、米山人の印を借りて捺している⁷⁾

『伊賀市史』が本作品に言及するのも、米山人と藤堂家の家老による貴重な合作だからである。なお、尾張藩の大坂蔵屋敷も、津藩のそれと同じく天満にあり、両屋敷は近い位置にあった。本作品は、寄合書といわれる様式で、会合の記念に描かれたものであろう。

ところで、本作品の寿老人は、米山人が描いたとされている。本作品には付属資料が見当たらないので、あくまで画面上の情報から判断するしかない。上部の画賛は、それぞれの落款から、高基、宗春の筆になることは間違いない。下部の書き入れは、画賛ではなく、いわゆる「識語」であり、米山人の筆になる。なお、落款や画賛以外で、制作状況等に関する書き入れを、榊原悟氏は「識語」と呼ぶ⁸⁾。米山人の「識語」について、おそらく今まで翻刻が発表されていないので、以下に読下して掲載する。

尾藩儒官秦先生蓬萊外史の詩画を見貶す。余因って援筆し戯れに其の意を激す。會して宗春翁余の茶室を訪う時、月居座に在り、翁に代りて此の句を作り、余遂に之を書す。翁忽然として筆を把り余の書に臨す。皆文墨の餘興略記し、以て他日の茶話と為す。

つまり、本作品の制作状況として、はじめに蓬萊外史すなわち高基が詩画を作り、その出来を秦宗春は見貶した。そこで、米山人は、高基の書画

に対してある句を書し、高基を励ました。ある句とは、かつて宗春が米山人の茶室を訪れた際、同席した月居が作ったもの。月居とは、蕪村門下の俳人で、京、大坂で活動した江森月居(1756–1824)のことか。そして、宗春は、米山人が書した月居の句を臨書したのである。

このように解釈する場合、中央の寿老人は、米山人ではなく高基によって描かれた可能性が浮上する。簡略化し、記号化された寿老人像の作者同定について検討の余地があるのは確かであろう。筆者は、米山人が描いたいくつかの寿老人図を含む人物画を複数見たが、本作品の寿老人は米山人の作としては特殊であると考えている。なお、宗春による「昔より／是長いきの／かしらなり」は、月居の作句。高基による「手承三美祿／仰拝壽星光／壽星光所照／瑞氣満高堂」は、和歌ではなく、漢詩(五言絶句。光、堂は平声陽韻)である。

以上のように理解すれば、本作品のみからでも、米山人の茶室に様々な人物が頻りに往来していたことがわかる。また、本作品が後日、米山人の茶室に掛けられ、高基、宗春との交遊を話題にする様子も目に浮かんでくる。

図1 岡田米山人《絵事問答図》個人蔵

図2 岡田米山人《嵐芝翫七変顔図》1813年頃、個人蔵

図3 岡田米山人《寿老人図》1815年、個人蔵

1. 神山登「岡田米山人・半江父子の生涯」『古美術』第53号、53頁。
2. 小谷利明「資料紹介 44 梅園」『大坂夏の陣400年記念特別展 八尾地蔵常光寺』八尾市立歴史民俗資料館、2015年、65頁。安永拓世「墨梅園屏風 岡田米山人筆」『八尾市文化財調査報告81 常光寺調査研究報告書』八尾市教育委員会、2018年、96頁。
3. 「生涯150年記念 富岡鉄斎展」京都新聞社、1985年、251頁に図版。
4. 吉澤忠「日本南画論攷」講社、1977年、409頁。
5. 河野元昭「文人画 往還する美」思文閣出版、2018年、451頁。
6. 「伊賀市史・第2巻 通史編 近世」伊賀市、2016年、816頁。
7. 神山登、前掲注1、64頁。
8. 榊原悟「日本絵画の見方」角川書店、2004年、281頁。



ポスター、ひる・ういんどなど 開館当初の普及のはなし

1982年4月1日のこと。入庁式が終わり辞令を片手に本庁舎の確か6階でエレベーターを降りた。すると省エネでやや薄暗い廊下の向こう、美術館建設準備室の一角がなやみ騒がしい。廊下にロッカーやら机やらが運び出されている。何とこの日は、美術館に引越する日だと…、その時初めて知った。皆さんラブな格好で忙しく立ち働中、スーツの上着をその辺に引っ掛け、ワイシャツを腕まくりして、私も作業に加わったのだった。これがその後15年に及ぶ波乱(?)の美術館生活を象徴する初日となった。

三重県立美術館の学芸組織には、現在とは異なって、当初学芸課と普及課が設けられていた。私は普及課に配属となった。その時は、「ええなんぞ?」というのが偽らざる気持ちだった。大学で美術史の専門の勉強しかしてこなかった私には、全く寝耳に水。社会人としての洗礼を受けた瞬間であった。

そもそも「普及」って何をやるの? それが正直な気持ち。ちなみに現在の美術館HPを見ると「普及」の業務として、次のような語句がある。

普及

美術館のあり方の特徴は、それが単なる象牙の塔に留まらず、常に社会に積極的に働きかけようとすることにあります。

企画展開催に際しての広報活動、美術講演会、トークや美術セミナー、遠隔地の人々を対象にした移動美術館、美術館ニュース「HILL WIND」の発行などを行っています。

(1. 三重県立美術館について 美術館の概要)

一口でいうと、交渉ごとの多い仕事で、これは当時も変わらない。後になって次第にわかってきたことだが、そもそも学芸員は交渉ごとが多い。例えば、企画展の出品交渉はその最たるもので、学芸員として避けることはできない。実は交渉ごとを得意とは思っていなかった私は、さらなるプレッシャーに押しつぶされそうな暗澹たる気持ちに襲われたことを苦しい思いとして今でも覚えている。

当時は9月25日の開館を目指して目まぐるしい状況で、普及の仕事として、ほかにもボランティア組織や友の会の設立、ビデオ等の視聴覚機器の開発、美術館概要の作成などに追われていた。もちろん、駆け出しの私にボランティアや友の会といわれてはならずもなく、どうにかやれそうな視聴覚機器の開発に四苦八苦しながら取り組んだ。しかし当初案はボツ。

「普及」の業務のひとつに挙げられている美術館ニュース「HILL WIND」については、当初関わった者として若干の説明をしたい。挿図を見ていただきたい。1982年8月の創刊号は、「HILL WIND」ではなく「ひる・ういんど」とひらがなタイトルであった。表紙には、赤いラインで挟まれた訴求力のある赤いひらがなの下



「ひる・ういんど 三重県立美術館ニュース」創刊号 1982年



「開館五周年記念 曾我蕭白展」図録 1987年



「印象派の序詩 ヨンキント展」ポスター 1982年

に小さく「HILL WIND」が添字してあった。「ひる」は丘。美術館の立地に由来する。丘から吹き下ろす爽やかな風。なかなかいい案を出せない学芸員たちに、初代館長陰里鉄郎先生からの提案だった。聞いたとき、ひらがな表記はかっこいいかなと思いつつも、まだ20代だった私の耳にはなんだかちょっと古くさい音に聞こえたのも事実だった。「丘の窓」と勘違いされたり、「ひる・あんどん」と揶揄されることもあったが、それも今は昔。当時の陰里館長の年齢を遥かに超えてしまっている今の私には、懐かしさとともに、愛着が湧いてくるのが不思議だ。

挿図には「ひる・ういんど」のほかに展覧会のポスターと図録表紙の一例を掲げた。歌舞伎の定式幕のようなだんだら模様を左右・四周に貼り付けた意匠が異彩を放っている。この統一性のあるデザインは、展覧会で言えば「20世紀日本美術再見 III 1930年代」(1999年開催)のポスターと図録まで、美術館ニュースでは「ひる・ういんど」から「HILL WIND」に転換する直前の2003年3月31日発行の第74号まで20年前後続いた。三重県立美術館の最初の20年を象徴するこのデザインは、杉浦康平さんと高弟の谷村彰彦さんの作品。杉浦さんは日本を代表するグラフィックデザイナーでありアジアの伝統図像の研究者としても名高い。陰里先生の友人でもあった。

ポスターには、図録「ひる・ういんど」とは一見してわかる違いがある。それは、何故か画面上方に赤い丸と黄色い丸が雲に乗って漂っているところ。杉浦さんによると、「三重県といえば伊勢神宮」だから…。中世から近世にかけて伊勢神宮の御師(参拝・宿泊などの世話をする神職)が全国を行脚して参宮を勧誘するプレゼンテーションの際に使用した「伊勢参宮曼荼羅図」に必ず描かれるのが日月の図像で、これを採ったのはアジア図像学の大家ならではのものだろう。この日月、西洋絵画であろうが現代美術であろうが、どの展覧会ポスターにも委細構わず現れ、違和感を放ちつつも存在を主張していた。杉浦さん曰く、「銀座でも目立つだろう。」確かに。

山口 泰弘(やまぐち・やすひろ)

1955年三重県生まれ。東北大学大学院文学研究科美学美術史専攻を修了後、1982年より、三重県立美術館に勤務。1997年に三重大学教育学部の助教授に着任し、教授を経て、現在特任教授および伊藤小坡美術館顧問。専門は江戸時代絵画史。美術館時代に担当した主な展覧会に「曾我蕭白展」(1987年)、「三重の美術風土を探るII」(1992年)、「江戸の風流才子 増山雪齋展」(1993年)がある。

山口 泰弘

Hill Wind コレクション紹介 小林研三《鳥》

上村 友理

「暖かい心地のする」という言葉がしっくりくる。早春のまだ肌寒い日、表に出た時にふと降り注ぐ日の光を感じているような気分という、何となくわかっていただけるだろうか。

小林研三は三重県四日市市生まれ、桑名市に自作した「小さな家」を構え、妻と狸と猫と犬、ウサギ、リス、オウム、インコ、小鳥数十羽に猿のチョコ、懐いていたカラスのカー子と一時大所帯で暮らし、晩年まで住んだ¹。

小林は1960年代前後から一時期、頻繁に鳥の絵を描いている。加えてこの頃から画風に変化が生じ始め、それまでのゴッホやクレーに影響を受けていたと思われる色彩分割や筆運びからは離れていく。小林自身は画風の変化に対して「1969年に、13年間一緒だったアフリカ産の猿と狸が亡くなったのが契機で、画風を変えました²」と発言している。しかし、「以前の私の主題は、どちらかといえば私にとっての家族、動物でした。旅行を契機に、それが風景に変わりました³」という発言もあることから、小林の言う画風の変化は絵面の事ではなくテーマが変化した事を指していると考えられる。

本作は、1960年代中頃に描かれた「鳥」の1枚だ。右を向いた一羽の鳥が翼を広げ、周囲にはぼつぼつとかすれぎみの黒・赤・黄色・オレンジ・青といった色点が散っている。全体的に淡くけふるような柔らかい色調で構成され、ともするとぼやけた印象になってしまう所を、ややはっきりと描かれた鳥の目が全体の調子を整え、画面を引き締めている。

小林はよくメルヘン画家と評されるが、対象を単純化した絵は優しくはあっても甘さは感じられない。それは、優しい画の中から感じられる一歩引いた視線に、小林の現実に対する冷静な姿勢をうかがい知る事ができるからだろう。

鳥の目はじつとこちらを無関心に眺めている。媚びへつらったような様子が無い所に、ああ鳥の目はこういう目だと納得させられる。これもまた、画家が動物たちを家族として扱い、ありのままを受け入れて一緒に暮らしていたからこそなせる技だと思う⁴。

1. 桑名市博物館編「没後10年記念特別企画展 小林研三展」図録、2011年、67、72頁
2. 「活躍する四日市の人 メルヘン画家・小林研三さん」『広報よっかいち』1990年9月、「小林研三 思い出美術館へようこそ」>「絵本・詩画集・雑誌」>「雑誌記事・ことば」(<http://yamagarou.art.coocan.jp/kobayasi-kenzo-museum/kenzo-kotoba2/kenzo-zassi-sigayuu/kenzo-1990-9yokkaiti-kouhou.htm>)より引用 2021年12月17日閲覧
3. 磯部壽資「われら国際人⑦ どこか西欧のおいがして」『読賣新聞』1990年1月10日
4. 「アニメ」平凡社 1985年6月、「小林研三 思い出美術館へようこそ」>「1980年代」>「1985年6月 雑誌の特集」(<http://yamagarou.art.coocan.jp/kobayasi-kenzo-museum/kenzo-kotoba/kenzo-kotoba-zassi-1985-6mania.htm>) 2021年12月17日閲覧

鑑賞支援教材紹介

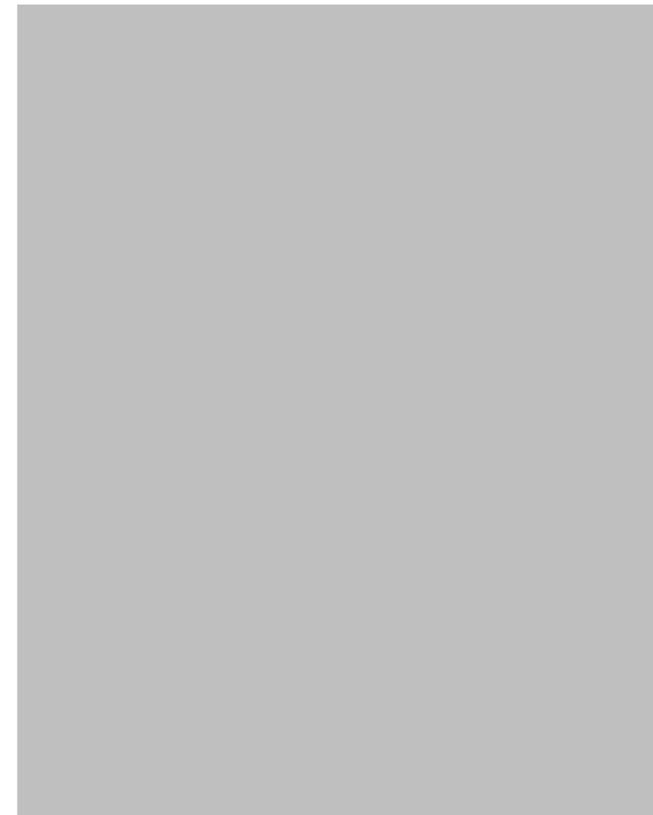
セルフガイド

内藤 由華

三重県立美術館には、鑑賞を支援する教材があります。その中の一つ、セルフガイド「三重県立美術館のコレクション・ワークシート」をご紹介します。

35種類あるこのガイドは、当館の所蔵品35点の鑑賞をサポートします。ガイドには画家の紹介や、何が描かれているのか、何に見えるかなどの様々な問かけがあります。それを基にじっくり鑑賞すると、普段の鑑賞では気が付かなかった新たな発見があるかもしれません。是非一度、当館の作品の前でセルフガイドと共に鑑賞を楽しんでみてください。作品をより身近に感じていただけたらと思います。またガイドは書き込みができるようになっており、ご自宅や学校の授業などでもご活用いただけます。

セルフガイドは常設展示室入口で希望者に配布しており、どなたでも手に取っていただけます。どうぞお気軽に声をおかけください。



小林研三《鳥》1965年



三重県立美術館+JAMM 研究会制作 三重県立美術館のコレクション・ワークシート